

オルガニストとして半世紀

元大学オルガニスト

堀井美和子

HORI Miwako



オルガンの椅子に座る度、私は無理やり「連れ戻され」ます。どこから!? 神さまから遠く離れた場所から。オルガンに向かうと否応なく主の前に立たされるのです。そして問われます、「お前は一体どこに居る(居た)のか?」と。

礼拝奏楽をする、というのは並大抵のことでありません。なぜならそれは単に演奏技術を披露するための場とは違い、自ら礼拝を捧げ、会衆の祈りと讃美を支える場であるからです。信仰と生き方が問われます。一方で、音楽的観点から言えば、十分な演奏技術と音楽性も問われます。ただ現実はその理想通りにはいかない。ので祈りが欠かせません、「主よ、助けて下さい!」と。

私が青山学院大学オルガニストに就任したのは1974年、大学1年のことでした。神学部教授でいらした奥田耕天先生のもとにオルガン

20代は貪欲に勉強しました。バロックから現代に至るまで片っ端から譜読み、技術を磨き音楽性を高めることに集中した時期。「未来は無限に広がっている」ように感じていたものです。30代は子育てをしながらも精力的に演奏活動。頂ける仕事は何でも引き受け、多くの指揮者・ソリスト・合唱団・オーケストラと共演できたことは貴重な財産となりました。また、東京ユニオンチャーチは多国籍のクリスチャンが集まる教会であるため、様々な讃美の形に出会います。基本的にはオーソドックスな曲が多いのですが、現代曲、ジャズ風の曲、民族音楽風の曲やテゼスタイル[※]などが取り入れられることもあり、フレキシビリティが養われ表現の引き出しが増えました。また、国境を越えて多くのクリスチャンと信仰を共有できるという恩恵にもあざかりました。ただ、その頃は充実している反面、超多忙で疲れ気味でした。音楽の世界の厳しさを思い知らされた時期でもあります。優秀な人が大勢いる中で「私に一体何ができるのだろうか?」という疑問、不安。そして挫折感を味わうことも度々ありました。

40代はプライベートで思いもよらぬ危機に直面。私は奈落の底に突き落とされます。結果的に「女手一つで二人の子育て」をすることとなり経済的にも窮地に……。そんな中ある牧師先生との対話をきっかけに、私は突然のように根源的な意味での自らの罪に気がかされ、打ち砕かれることとなります。それまでの自分はいか

を勉強したい一心で「押しかけ弟子入り」したのが5月、リードオルガンのレッスンからパイプオルガンへと移行したのが7月、そして9月には実力を認められ、推薦されて週1度の礼拝奏楽を担当させて頂くようになったのですが、野心のかけらもなかった私にとってこれは全く予想外の展開でした。その後結局50年間勤めることになったのは神さまの不思議なお導き、大いなる恵みによるものとしか言いようがありません。駆け出しの身でありながら起用されたことと自体奇跡的ですし、ひと言で50年と言っても様々な出来事があったからです。

振り返ってみると、10代はオルガンに出会い無我夢中で練習した時期です。何もわからずに飛び込み、その意味も価値もよくわからないままオルガンを弾けることがひたすら喜びでした。1975年には奥田先生の指示によりオラトリ

に神を神ともせず、自力で何でも得てきたかのように勘違いし、傲慢で自己中心的な生き方をしてきたことか! こんな私のためにこそ主イエスは十字架にかけられたのだ! との思いに打たれた私は泣き崩れました。圧倒的な愛と赦しとが強く迫り、十字架の主が「我がもの」となった瞬間でした。18歳で受洗したにも拘らず、十字架を真に自分のこととしてわかつてはいなかったのです。現実生活の苦しさはその後も長く続きましたが、崩壊することなく歩み続けることができたのは、ある意味「奇跡」でした。周囲の人たちにも随分助けられました。二人の子どもたちは不思議なほど素直に逞しく育ってくれました。その背後に主の深い憐れみと守りがあつたことは言うまでもありません。

50代は次々と身体の不調を経験。「人生は短く、多くのことはできない」と思い知ると同時に、死を身近なものとして実感するようになり、命も健康も家族も音楽も全ては神から与えられた恵みだと改めて感謝の思いを深くします。もはや自分の力は頼みにならないと悟ると自然に余計な力が抜け、欲望も虚栄心も手放せるようになり、「生きて働かれる主に伴われていく」という安心感をもった生き方へと変えられていきました。

60代はようやく自分の進むべき道が見えてきて落ち着いて歩めるようになりました。あの辛い試練も私には必要なことだったのだと思いません。そのおかげで信仰も人格も鍛えられ成長さ

オ・ソサエティ合唱団の伴奏を任せられ、メサイアやパッサの受難曲などの伴奏をどんどん初見で弾くこととなり、これもまた楽しくて夢中になりました。そして1978年、東京ユニオンチャーチオルガニストのオーディションを受けよう、やはり奥田先生から言われ、戸惑いつつ受けたところ合格、オルガニストとして就任。アメリカ人の教会ゆえ正式な契約を交わした上での「仕事」でした。これが大学4年の時。その頃から将来の進路に悩むようになります。仏文科に在籍しながら学業よりも音楽への情熱が圧倒的に勝っていたのですが、「卒業したら就職しろ」と言う父に逆らえず青学職員として就職。ただその後も「やはりきちんとオルガンを勉強したい!」という思いが抑え難く1年半で退職、その半年後に東京藝術大学別科(パイプオルガン専攻)に入学したのです。

せられました。「およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後には、それによって鍛え上げられた人々に、平安な義の実を結ばせるのです」(ヘブライ人への手紙第12章11節)とあるように。そして最近では「クリストの内住」、即ち「生きていくのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです」(ガラテヤの信徒への手紙第2章20節)という信仰の奥義がほんの少しずつ分かってきたような気がします。何という恵みでしょうか。

「神の計画」は人間の思いを遙かに超えています。想定外の方向へ連れて行かれたり、時には沈黙されているのでは? と思えたりするほどに苦しいこともありましたが、後から思えば常に主は何らかの形で私を助けて下さっていたのです。私には消したい過去や恥ずべき失敗、心の奥の傷もありますが、「後ろのものを忘れ」、主が完成へと導いて下さると信じ、ゴールに向かって走るのみです(フィリピの信徒への手紙第3章12〜14節)。私は今年3月に青学を定年退職しましたが「これで終わり」ではありません。音楽(芸術)に終わりはないからです。地上での生涯の終わりが来るまでは、真実なる神の愛と赦しとを感謝して受け取り、音楽を通して主を讃美し、導かれるままにこの旅路をのびのびと歩んでいきたいと思えます。

※フランスのテゼ共同体で始まった祈りの形態。